

第6回キャリア教育推進懇話会の協議記録

- 「日向市」が好きな児童生徒を増やす取り組みが基本である。
- 子どもの貧困問題も進学先選択に影響している。市長部局との連携大切。
- センター会議に市長部局の産業経済部（商工港湾課）からも出席可能である。「よのなか教室のもつ力」の1, 2番目は産業経済部の関連が深い。
- 退職後のシニア（ジュニア）の役割は大切。健康寿命も伸びるのでは。
- 「人の役に立ちたい」という数値が高いのはうれしい。小学校3~4年生ぐらいから「人の役に立つ」ことを意識する子供が増えていることを実感する。地域の学習が始まる小学校中学年はキャリア教育の重要な時期かもしれない。
- 将来「よのなか先生」になりたいという子供がでてきており、成果は着実に広がってきている。しかしPTAの中にはまだ「よのなか教室」を知らない親もいるのも事実。
- やりたい仕事があれば「日向で働きたい」という数値は増えない。
- 「日向市のよさ」をひろげアピールしていく必要がある。
- 中学生が都会へあこがれるのは当然。
- 普通科系の倍率が低いのは親の感覚の変化。大学で何を学ばせたいかではなく、どんなところに就職できるかになっている。
- 高校生を核としたキャリア教育の実施を広げるのはいいこと。日向市に将来帰ってきてリーダーになる若者を育てたい。
- 「よのなか先生」を務める職員は確かに成長している。
- 「日向市で働きたい」の数値が低いが、一度外で働いてもいいと思う。人生を考える時期に日向市にもどってくるほうが、ずっと日向市にいたいと思うよりいいのでは。
- 「よのなか教室」では、子供だけでなく親も巻き込むことが必要では。参観日にくらめて実施することも推奨したい。日曜参観、バザーなども。
- 人口減少対策、U I J ターンの促進のためにはまずは郷土愛醸成である。
- キャリア教育アンケートは高校生も実施したらどうか。
- 課題の4の継承のための施策が大事であり難しい、取り組みやすいシステムを作っていただきたい。
- 「日向市に帰ってきたい」という「日向市が好き」にしたい。働く場所の確保が課題。
- 大学も就職率で評価されるようになり大変。
- 学ぶことの大切さの理解は高まってきている。努力してきついても学ぶ力をつけていくキャリア教育をしっかりとやっていく必要がある。
- 特別支援学校でも年に2回程度は保護者を巻き込んだ「よのなか教室」の実施ができそう。
- だんだんマンネリ化してこないように、インプット重視からアウトプット重視にして、子供たちに主体性をもった活動をさせる取り組みを広げていかなければならない。